

小説家の四季 二〇一六年 夏

佐藤正午

長編小説をひとたび書き出したら書き終えるまで、ほかの小説を読むのは絶対やめるべき、だったか、私はなるべくやめるようにしている、くらいだったか、どっちかの主旨のことを誰かが述べているのを昔どこかで読むか聞くかして、理由は、他人の小説を読むと影響は避けられないから、とか、自分の書いている小説の文体にブレが生じるから、みたいなことだったのじゃないかと記憶しているのだが——ここまで、どこからどこまでぜんぶ曖昧な記憶だが——その伝でいくと、長編小説を書いているあいだは、もう、ほかの文章を書くのもやめといたほうがいいのかもしれない。たとえば、この「小説家の四季」を書くために、いったん小説から離れてエッセイに頭を切り替えると、こんど小説書きに戻ったとき文体がブレて調整に苦労するかもしれない。

そんな理屈をこねた上で、

「なんかさ、いまはもう、執筆中の長編小説以外、ほかの文章は書きたくない気分なんだよね、一行たりとも」

試しに電話で訴えてみると、担当の編集者は、

「お、いいセリフですねぇ、小説家の熱が伝わりますねぇ」

と機嫌良く応えてはくれるものの、じゃあ今後は小説に集中してください、小説以外ほかの文章は書かなくてもいいです、書かなくてもすむように私が掛け合って話をつけます、などとは決して言うてくれない。

だいたい、長編小説を書いているあいだといっても、一か月や二か月の短い期間ではないのだし、ほかの小説を読むのは絶対やめるべき、にしても、なるべくやめるようにする、にしても、どっちにしても実行できる小説家はどこにもいないと思う。そもそも小説を読むことの好きが高じて、読んだ小説の影響をたっぷり受けて、小説家なるものが出来あがるのではないか。小説家が、小説を読むことを一年も二年もやめて平気で自分の小説だけ書いていられるだろうか。加えて、ただでさえ小説が読まれないご時世に、小説家が率先してほかの小説家の小説を読まずに一般読者に示しがつくのか。示しがつくとかつかないとか言えばなんか偉そうなので、言い直すが、申し訳が立つのか。自分が他人の小説を読まずに他人に自分の小説を読んでもくださいとお願いできるのか。

また一年も二年もの長期間、小説家がひとつの長編小説にかかりきりで、たまに「ほかの文章は書きたくない気分なんだよね」みたいな躁状態になるのは自由だとしても、実際にほかの文章をまったく書かずに生活は成り立つのか。みみっちい話だが、たとえば連載エッセイやら何やらの原稿料収入なしに月々の家賃や光熱費等をまかなえるのか。現在住んでいる借家の家賃はいくらだ。電気・水道

料金はいくらだ。加入している文芸美術国保の保険料はいくらだ。しかるに毎月の原稿料収入はいくらだ。小説とエッセイの頭の切り替えとか文体の調整とか悠長なこと言ってる場合なのか？

……と小説家の台所事情を語りだすと、そっちの方向へ勢いがついて話の筋道を見失いそうなので、どうか書き出しの一行目からなんでこうなったのかすでに道に迷っているの、先へ行く前にここまでを自分にもわかりやすく整理すると、まず、去年の夏ごろから僕は書き下ろしの長編小説に取り組んでいる、その傍ら、

1. 他人の書いた小説も積極的に読んでいる。
2. 長編小説以外の文章も書いている。

で？

3. そういえば、他人の書いた小説を読んでいると——ほぼ常に長椅子やベッドに寝転がって読んでいるのだが——途中で、開いたまま本を腹の上に伏せて物思いにふける時間がよくある。

物思いの種類は三つある。

そのうち二つまでは、他人の小説に書かれている言葉、単語一個によってもたらされる。たった一語でも、読んでいて引つ掛かりをおぼえるとページをめくる手がそこで止まって物思いが始まる。

ごく最近の例から拾うと(ほんの一例だが)、「病み上がり」という言葉。

これがこないだ読んでいた他人の小説中に出てきて、出てきたとたん目が吸い寄せられ、見つめるうちに脳内の記憶回路が勝手に敏感に反応して、遠い過去の場面がたちまち呼び起こされ、小学校時代を過ごした町へと連れて行かれた。

昼下がり、商店街の通りでばったり会った同級生の吉居くん(実名が、気障な感じの巻き方でマフラーをしていて、真冬でもないのに変じやないかと思っていると、吉居くんは自分から、

「病み上がりだからね、用心しろと母に言われて」

と言いつつ。吉居くんは当時小学五年生の少年だった。たぶん風邪が治って外出する息子に、母親は「病み上がり」の意味を言いつつ聞かせたのだろう。僕は吉居くんの口から初めてその言葉を教えられた。なんと五十年前の話だ。それはいいが、あの日の午後、十歳の少年たちは商店街で何をしていただろう。学校は休みだったのか。それもどうでもいいが、あの吉居くんと付き合いはいつ途切れたのだろう。吉居くんはどんな大人になったのだろう。いまごろどこで何をやっているんだろう……。これが物思いの一例である。

あと小説を読んでいくわした言葉に、私的な理由からではなく、職業柄、引つ掛かりをおぼえることがある。良い意味でも悪い意味でもあるが、ここで悪い意味での引つ掛かりの具体例をあげたりすると、同業者に喧嘩を売ようなものだし、もしくは天に唾することにもなりかねないので、それはしない。良い意味のほうだけに。多くの場合、ああそうか、こんな言葉遣いがあったか、気づかなかつたなあ、と感心させられて、ページをめくる手がそこで止まって物思いに入っていく。

といつても、この場合も具体例をあげるのは難しい。最近読んだ小説の中から感心させられた言葉遣いを引っぱって来るだけの話だが、でもそれをやると、どういう文脈で書かれているか説明するために前後の引用が必要になり、小説のタイトルにも小説家の名前にも触れないわけにはいかなくなるし、僕にそんな気はなくても読む人にその小説家のその小説を絶賛している、推薦している、ヨイシヨしている、などと勘違いされる心配がある。そうではなくて、ほんの一箇所、引つ掛かっただけ。こんな言葉遣いがあったか、と僕が感心するのは、別に同業者の破天荒な新語にびっくり仰天するわけではなく、もともと辞書に載っている、誰もが知っている(はずの)言葉を、ここでこう書くのか、といまさらながら気づかされる、手垢のついた言葉の差し出し方に不意を打たれる、そのくらいの意味で、そのくらいの意味での感心が、物思いの入口になる、という話なのだ。

敢えて例をあげる。小説からではなく、無難に、ちよつと遠いところから引っぱって来る。

競輪の実況放送というのがあって、ピストルの号砲が鳴ってレースが始まると、アナウンサーは、走り出した九人の選手たちを先頭から順に最後尾まで紹介していく。それがお決まりの手順で、選手名のほかに、九人それぞれに短いコメントを付けたりする。たとえば、先頭の選手は前回、決勝に進出している、とか、その後ろの選手は前回・前々回と連続で初日は一着だった、とか情報をまじえてレースの雰囲気盛り上げていく。その際、表現の手段として、まずは競輪場の地名が用いられる。

〇〇選手は「ここ佐世保競輪場」では好成績を残しています。

またあるときは「競輪場」を「バンク」に言い換えて、

〇〇選手は「この佐世保バンク」では過去二回優勝の実績があります。

などと表現する。あるいは、地名をはずして、ただの「競輪場」とか「バンク」とか言い換える場合もある。

〇〇選手は「この競輪場」では好走しています。

〇〇選手は「このバンク」との相性抜群です。

好成績とか実績とか好走とか相性抜群とか、そっちの表現は多彩でも、場所のほうは「競輪場」か「バンク」で決まりだな、と高をくくって競輪中継を眺めていると、あるとき、アナウンサーはこんな言い方をする。

〇〇選手は「当地」を得意にしています。

ああそうか、こんな言葉遣いがあったか、と不意を打たれるのはそんなときである。

なるほどね。「当地」ね、「当地」とは気づかなかったなあ、と感心させられて、じゃあほかはどうだ、まだあるか？ あるな。「この地」はどうだ、「当バンク」は、「本競輪場」は？「本場」でもいか……という具合に、レースの結末を見守るのも忘れて考え事に入っていく。

つまりこれと似たことが、他人の小説を読んでいるときにしばしば起きる、と言いたいわけで、ま、例にあげたのが競輪の実況放送だから語彙は幾分限られるけれど、小説の場合は、それこそ辞書一冊分の「ああそうか」があり得るわけで、そのへんの細かいところは想像で補っていたきたい。とにかくこれが物思いの種類の二つ目である。

三つ目は、入るきつかけはよくわからない。

原因不明としかいえない。長椅子に寝転がって他人の小説を読んでいる途中で、いつのまにか、本は腹の上に伏せて、目は天井の隅の一点を見据えて、ぼんやりしている自分を見出すことがある。だいたいそういうときは、昼間書いた小説の、内容の不備に気づいて頭の中でああでもないこうでもない書き直している。

あるいは、長椅子からむっくり起き上がって、その拍子に腹から本が滑り落ちて、たまたま表紙の角の部分が膝小僧や足の甲に当たって「いてっー」と声をあげたりすることもある。そういうときはだいたい、痛みを堪えながら仕事机までたどり着いて、シャーペンを握って、たったいま頭に浮かんでいた小説の筋の展開を、書きかけの原稿の余白に急いでメモしたりする。

だからどっちにしても、寝転がって考えているのは自分の小説のことなのだが、ただ、さつきまで読んでいた他人の小説の世界をすりと抜け出して、昨年来こつこつと書き溜めている小説の世界のほうへ知らぬまに移動する、いつ移動したのか、その橋渡しになったものが何なのか、気づかない。他人の新刊小説が期待はずれだったせいで、退屈して、もっと面白い小説のほうへ頭が向いたのかもしれない。逆に、他人の小説を面白がっているうちに、ふと、自分もこうしてはいられないと焦りを感じて、書きかけの小説の心配が始まったのかもしれない。それはよくわからない。

よくわからないことも含めて、以上が、他人の小説を読むことによってもたらされる物思い——遠い過去へ飛ばされる。類語の探索に時間を取られる。自分の小説を省みる。——三種類の物思いの正体である。

で？

4. そういえば、今年は六月四日に九州、四国、中国地方の梅雨入りがまとめて発表された模様。昼食にソーメンを茹でる季節がそろそろ始まる。

5. 昨年長編小説を書き出してからもうじき一年が経とうとしている。

6. というわけで、このあと小説書きに戻る。書きかけの長編小説の話は次回また触れる。たぶん、どうぶん続く。